

# チョウセンサザエの種苗生産

大城 信弘

## はじめに

タカセガイ中間育成人工礁の、その他の種での活用を探る為、チョウセンサザエを種苗生産し、中間育成に供し、一部は池内で継続飼育した。その結果、人工礁中間育成群は殆ど残存せず、礁から逸出したものと考えられた。尚中間育成礁試験は水産振興課の要請に依り実施した。

## 方法及び結果

平成 8年 8月21日に、これまで数日間、産卵誘発に用いられていた、天然採取貝37個体を500ℓ一槽に収容。午前中で一個体を割り出し、精巣部の懸濁刺激を加え、止水・通気とし、夕刻に換水した。

21時20分に産卵を確認し、精子濃度も高くないのでそのまま産卵させ、後に卵を40 $\mu$ mネットで濾し、別500ℓ槽に通気で収容した。産卵は一個体で約33万粒で有った。

孵化はほぼ100%で、翌日孵化した幼生約30万匹を屋外2.75t槽に収容した。2.75t槽は波板10枚組のホルダー12組を設置し、硫酸ストレプトマイシン20g、ナビキュラ元種(3ℓフラスコ1本)、珪藻用肥料(硝酸カリ40g・他)、オゴノリ140gのジューサーでの粉碎物を添加。上面をユスリカ侵入防止で2mm目の防風網で覆い、寒冷紗等で約70%の遮光とし、止水・微通気とした。

26日に換水し、寒冷紗を除きナビキュラ元種、肥料を添加した。以後適時珪藻用肥料、オゴノリ粉碎物を添加し、9月4日から週1~2回転程度の微流水とし、汚れに応じてサイホン等での底掃除を行った。飼育後半の冬季には注水を強めた。

平成 9年 2月 4日に池開け、15,750個を取り上げ、殻長1.8mm~9.8mm、平均4.8mmを5日に1.5万個体を恩納村のタカセガイ中間育成礁での中間育成の為出荷した。残りは一部を標本とし、720個を元水槽で継続飼育した。

その後中間育成礁群は、5月23日の観察ではほんの数個が観られたのみ(普及所、近藤、私信)で、10月15日のタカセガイの取り上げ時には確認されず、死に殻が数個

観られたのみであった。尚死に殻は、小形で新たな成長の後が無く、投入時のものと思われた。

池内養成群は、平成 9年 6月19日に740個を取り上げ、その内の660個を4t槽に移し、継続飼育中である。殻長は7.1mm~27.5mm平均17.5mmであった。

## 考察

今回の種苗生産は、産卵槽から卵をネットで回収したにも関わらず、殻長4.8mmまでの生残率は5%で有った。チョウセンサザエは昭和63年度度にも生産されており、種苗生産は比較的容易な種と言える。

槽内での中間育成でも殆ど死亡が無いが、これは収容が低密度であった為、餌料藻の発生が間に合った事と、生息場がリーフ縁の浅瀬で、池内で発生する藻類が天然と近似していた為と考えられる。しかし量産時の高密度飼育では、餌料不足が予想され、人工的に供給出来る適餌料が必要で有る。

人工礁での中間育成は、タカセガイのに入った外に、そのまま一舂当たり千個を投入して有る。その中でタカセガイは残っていたが、チョウセンサザエは残存しなかった。

礁での中間育成は水産振興課の依頼により、急遽行われたもので、チョウセンサザエの放流調査として成されたものではない。礁の調査も、水産業改良普及所が、タカセガイ調査の為に行ったもので、チョウセンサザエその物の追跡は行われていない。

その為、チョウセンサザエが食害に遭ったのか、逸散したのかは不明である。今回はヤコウガイも水試八重山支場により同時に試験されたが、ヤコウガイも殆ど残存しなかった。両種ともタカセガイより遥かに移動力があり、また日中は岩穴等、陰に成る部分に潜む事から、現在のタカセ礁ではその様な部分が無く、槽から逸出したものと考えられる。

今後、その様な隠れるのに好都合な、陰に成る構造を設けての試験も必要であろうが、いずれにせよ現状のタ

カセ礁での中間育成は行い得ないと結論される。

#### 参考文献

大城信弘・他.1990.貝類増養殖試験.昭和63年度沖縄県  
水産試験場事業報告書.p179-209.

村越正慶・山本隆司.1991.チヨウセンサザエ *Turbo*  
*argyrostomus*の種苗生産(概要).昭和62年・63年・  
平成元年度 沖縄県栽培漁業センター事業報告書.  
p73-74.